

## ■ パネルディスカッション

### 「男女共同参画の視点からの震災復興と新たな地域づくり」

コーディネーター：林 寛一 さん（常磐大学コミュニティ振興学部地域政策学科長）

パネリスト：石田 奈緒子 さん（北茨城市副市長）

高橋 早苗 さん（大洗町漁業協同組合女性部部长）

光畑 由佳 さん（有限会社モーハウス代表取締役）

宗片 恵美子 さん（NPO法人イコールネット仙台代表理事）



【林】早速始めさせていただきます。私は先ほどご紹介にあずかりました常磐大学の林と申します。震災の後、私どもの大学でも学生たちと一緒にボランティア活動に、私も一緒に各地を回りました。そこで気づいたことを一言最初にお話しさせていただきます。

私のゼミの学生、15名おりますが、そのうち女性は4名です。ボランティアにこれから行くけれども、別にボランティアに行くから特に成績が加点されるとか、そういうことは一切ありません。本当にボランティアですよということを最初に言います。それで一緒に一応保護者と

してついていくので、やらないかと言ったら、4名の学生が手を挙げてくれました。その4名は女性でした。今、女性たちは何かをやりたいという時代に入っている。何か社会の中で活躍してみたい。恐らくそういうものが至るところにきっと起こっているのかなというような感想を持っております。

今日これからお話ししていただくパネラーの4人の女性の方々は、この震災の後、震災のみならず、いろいろなところで大変活躍しておりまして、皆様方もある程度ご存じではないかなと思います。きっと学生たちにとってもロールモデルとなる方々ではないかなと思います。あまり時間がございませんので、早速4人の方々から、この震災、女性の視点からどう見るか、これからの地域社会のあり方を含めて、男女共同参画を進めていく上においてきっと有意義な話、あるいはヒントがたくさん出てくるものと思いますので、それをうまく引き出すのが今日の私の仕事でございます。

それでは、早速始めたいと思います。まず、4人の方に1人ずつ、持ち時間は少ないのですが、1人5、6分ぐらいで、自己紹介と、それから震災があったときの対応等についてお話をしていただければと思います。

それでは、近いほうから順番にお願いいたします。石田副市長さん、お願いします。

【石田】 北茨城市の石田でございます。3年前から北茨城市で働いております。その前は県職員をしておりました。私からは自己紹介を兼ねまして、今回の震災で北茨城市が受けた被害と、どんな対応をとってきたか、その概要を5、6分で説明させていただければと思います。

まず北茨城市ですが、地図を出していただくと、ご存じのとおり、茨城県が一番北の端で、お隣はいわき市です。このいわき市と隣接しているというのが今後の原発関連で風評被害に遭ったり、あるいは福島の人、うちの市でもいっぱい受け入れたりしました。そういう土地というか、地理関係にございます。人口は4万6,000、世帯数が約1万7,000と、高齢化率も県平均より若干高いような地域でございます。

さて、3月11日ですが、2時46分、北茨城市では震度6弱、地震が起こりまして、その3分後に津波警報が発令されました。市では防災行政無線がないのです。整備してなかったのも、市の広報車、あと消防分団18分団全部出しまして、沿岸地域とにかく津波が来るから逃げろという広報車を走らせました。津波は、これは磯原の映像ですが、第1波が3時10分、第2波が3

時39分ということで、第2波が随分大きかったのですが、これは常磐線です。私の席からはスライドがちょっと見づらいなのですが、常磐線をとうとう波が超えまして、とにかくこれがショックでした。

大体市では、行政では災害が起きると災害対策本部というのが立ち上がって、市長が本部長になるのですが、災害が起こる前、例えば北茨城市だと震度4以上になると警戒態勢本部というのが敷かれます。それは地震であったり、あるいは洪水だったり大雨だったり、警戒態勢本部が敷かれると、男女共同参画という視点からいうと私は本部長です。今まで北茨城市にいて地震で警戒態勢本部というのが何回も開かれて、津波警報が出たといつて、真夜中でも市役所に集まったのですが、大体潮位が10センチぐらい上がりましたという感じだったので、これだけ大きいのでまた津波警報が出るなと思ったのですが、まさかこんなに常磐線を超えるような津波が来るとは思わなかった。そこが甘かったのだと思いますが、そういう状況でした。

これが次の地図なのですが、右側のほうが太平洋になりますけれども、上から平潟港、大津港、そして磯原の地区とありますが、水色の部分、塗ってある部分が津波で浸水したところで、大体7メートルぐらいの津波が来ました。被害の状況ですが、亡くなられた方も5人ほどいらっしゃいます。いまだに行方不明、見つからない方もお1人、そして最近関連死ということで3名の方がいらっしゃいます。家のほうの被害

は全・半壊で2,000、一部損壊6,000、市で1万7,000戸ですから、市内の約半数の世帯が被害を受けました。大変大きな被害です。公共施設の学校の体育館、あるいは病院、港湾、道路など、500カ所近く被害を受けていまして、被害総額は400億円を超えるのではないかというふうに見ております。

震災直後の写真、ちょっと悲惨な写真ですが、津波で岸壁に打ち上げられた船です。震災の半年前に防災訓練をやっておりまして、津波が来たら沖に逃げろということで、今回間に合った船は全部沖に逃げました。危険を顧みずに、皆あの津波に向かって船を出して助かった船もあります。でもこうしてちょっと間に合わずに上げられてしまった漁船もあります。これは今、全部撤去されて、修理して使えるようになっていきます。本当、震災直後はこんなふうに、津波の威力というのはただ家が壊れるだけでなく、それが道路をふさいでしまう。いろいろなもの、家財道具もどこに流れていったかわからない。そんなふうに本当にめちゃくちゃな破壊力です。

そうした中で、災害対策本部がありますが、これ本当に毎日、5月まで57回以上開きました。20人の市議会議員さんの中に4人ほど女性議員がいて、市長はとにかく市民の代表である市議会議員の人たちを毎日呼びました。昼間は避難所とか市内を回って、市民の要望、ニーズ、困っていること、全部拾ってきてくれと。それを毎日話し合って、即座に予算化できるものは予算化して、予算がなくてもやっちゃうものは

やっちゃうということで、行政と市議会と一体となって100以上の施策を打ち出していきました。

こういったところでも女性議員が入っていたということで、避難所で必要なもの、女性の生理用品ですとか、あるいは原発の後とはとにかくお母さん方が放射能をすごく気にしているということで、多分県内でいち早く学校の測定を4月の初旬から始めまして、それを全部ホームページで公表していくと。こういったことも女性議員がお母さんたちの声を拾って行って、それを反映していった成果だったのかなというふうに思います。

会議は全部オープンで、マスコミも入っていましたし、自衛隊も警察もすべて入っていました。ここでの成果を全部紙に書いて、翌日避難所に全部手書きで貼って、あとはNHKの上のほうにテロップが流れたと思いますが、あれを一生懸命流すといったようなことでやっておりました。

震災の対応としては瓦れきの撤去ですとか、被災住宅の取り壊し、あるいは5,000人ほど避難していましたが、その後、希望される方250戸程度は住宅のあっせんをいたしました。また、震災で職を失った方は市のほうで66人ほど雇用いたしまして、生活対策ということもしております。

今は今後の復興に向けまして、8月に震災復興計画の策定委員会、これは市内の市民の代表の方に入っているんですが、設置しまして、今後のまちづくりについて検討を進め

ているところです。

以上でございます。

【林】 どうもありがとうございました。石田さんは茨城県の自治体で最初に女性の副市長になられた方で、女性ならではの視点で今回の震災でリーダーシップを発揮して、注目されていた方でございます。

それでは、次にテレビでもご覧になられたかもしませんが、「かあちゃんの店」ということで大洗で活躍なされている漁協の女性部の部長さんである高橋早苗さんです。よろしく願います。

【高橋】 大洗町漁業協同組合女性部の高橋早苗です。

大洗の港を基地に、光栄丸という漁船で主にシラスをとっております。シラスというのはイワシの子です。そしてシラス干しの原料ともなっております。

ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、昨年4月、地元の水揚げされた新鮮な魚介類を皆さんに味わってもらおうと、漁師の母ちゃんたちで運営する「かあちゃんの店」を魚市場のすぐそばにオープンいたしました。この店では今まで漁業者の家でしか食べられていなかった、いわゆる漁師料理を提供しており、漁業になじみのない方たちにも楽しんでいただいています。おかげさまで開店以来大変好評をいただいております。父ちゃんたちがとってきた魚を母ちゃんたちがその場で調理するといったぐあいに、私たち浜の女性たちの活躍の場となっております。

また、70代の女性たちも自分の経験や知恵を生かして、現役で働くことができる貴重な職場となっており、皆さん、生きがいを持って毎日腕を振るっております。特に新鮮さが売り物の生シラス丼、海鮮かき揚げと水揚げしたてのお刺身の両方が楽しめる「かあちゃん御膳」などが大変人気です。お近くにお越しの際はぜひお寄りください。

さて、震災のことをお話いたします。

海辺にある私たちの漁業協同組合、船や網などの道具、そして「かあちゃんの店」は津波で破壊されてしまいました。「かあちゃんの店」は店内がめちゃくちゃになり、厨房機器や什器の何もかもがだめになりました。残っていたのは崩れかけた外壁だけ、ヘドロで埋まった店のカウンターの上には重たい冷蔵庫が乗っていました。

幸いなことに犠牲者は一人も出ません。地震が起きた2時46分は、店の込みぐあいの時間帯を過ぎておりましたので、1人のお客しかおりません。このお客さんにはお金を返し、すぐに避難していただきました。また、スタッフは全員避難警告が響き渡る中で逃げるのが精いっぱいでした。おおよそ30分後には押し寄せた津波の第1波はひざ下まで、1時間後に押し寄せた第2波、そして2時間後に押し寄せた第3波は4メートルほどまでになっておりました。津波が去った後には打ち上げた車、崩れた漁船、そして膨大な瓦れきが残されていました。この光景を見て、本当に津波の恐ろしさを感じました。

以上です。

【林】 「かあちゃん御膳」というのがある  
そうですけども、「とうちゃん御膳」もある  
そうでして、ご夫婦で行かれるときはお互い両  
方食べながらいかれるといいと思います。とて  
もびっくりするほどおいしい、また量があるも  
ので、今は人が多くて、なかなか入れなくて、  
私も入れない状態でございます。

授乳服で画期的な製品を開発したり、あるい  
は東日本大震災にあたりチャリティー手ぬぐい  
等の寄附をしたりしていらっしゃいます、今注  
目されている女性経営者の光畑由佳さんです。  
よろしくをお願いします。

【光畑】 こんにちは。今ご紹介いただきま  
したモーハウスの光畑でございます。

私たちの会社はつくば市にございまして、こ  
こにいる皆さんのように被害が甚大だった地域  
ではないのですけれども、やはり被災地という  
ことで、被災地につながる感覚を持ちながらい  
ろいろな活動をしてまいりました。

モーハウスといってもお分かりにならない方  
がたくさんいらっしゃるのではないかと思いま  
す。少し画像を流していますので、時々ごらん  
いただきながらお話を聞いていただきたいので  
すけれども、一応自己紹介いたします。今映っ  
ていますような赤ちゃんが何をやっているかと  
いいますと、おっぱいを飲んでるところなの  
ですね、赤ちゃんを抱いているだけのように見  
えるのですけれども。このお母さんが着ている  
服をつくってございまして、おかあさんが外でも

授乳できるような服をつくることで、女性が社  
会に出ていく、社会につながりながら育児をで  
きるようにというふうな活動をしております。

もともと私が車内で子供を泣かせてしまって、  
電車の中で授乳をしたことがこの活動のきっか  
けとなっています。私自身がどうやったら子供  
を産んだ後仕事ができるかなということを考え  
た結果、先ほどから画像が出ていますけれども、  
これ全部スタッフで、働いているところです。  
このような形で、赤ちゃんを抱っこしながら働  
くという形態をつくばの本社でもっております。

今つくばのLALAガーデンというところと、  
それから青山、表参道のウィメンズプラザの隣  
にショップがございまして、そこでも赤ちゃん  
を抱きながら、この写真は青山店ですけれども、  
赤ちゃんにおっぱいを飲ませつつ接客するとい  
うことをやっています。

震災当日ですけれども、私どもつくばで会議  
中でした。本当に今まで体験したことがないよ  
うな揺れで、この世が終わるのではないかとい  
う勢いで揺れました。何が起こったのか、だん  
だんと分かってくるにつれて、北茨城ですとか  
福島、仙台に家族がいる者もいますので、本当  
に家族はどうしているだろう、無事だろうか、  
連絡がつかないというふうな、その様子を目の  
当たりにしながら、みんなで肩を寄せ合っ  
てどうしようと話をしておりました。

会議ということで、都内からもスタッフが来  
ておりました。子供を置いてきた者もいれば、



子供を連れてきている者もいました。幸いなことに、私たちの会社は停電になりませんでしたし、たまたま井戸が動きましたので、避難所のような形で、周りの自衛隊ですとか、看護師さんですとか、そういったところで働いている方のお子さんもお預かりし、スタッフも預かり、みんな泊まり込んで、じゃどうやっていこうという話をしました。

私たちは、たまたま前に長岡、新潟のほうで震災があったときに、私たちの授乳服を避難所に送るとい活動をしておりました。避難所でお母さんが赤ちゃんにおっぱいをあげるときに、プライバシーがないので、寒い中、その中でも一番寒い隅っこのほう、そこに行って冷たい隙間風に吹かれながら授乳をせざるを得ないという状況を何とかしたいと、お客様から預かった授乳服をお送りするという活動をしておりました。そこで、まずそれをやろうということがその晩のうちに決まりました。

そして、避難所でおっぱいが続けられないのではないか、母乳がストレスで出なくなるのではないかという声も多分出てくるだろうということが、新潟の事例でわかっておりましたので、翌日、土曜日だったのですが、スタッフが、水が出ないということで、事務所に水を汲みに来たのですね。そこをつかまえて、今すぐホームページを更新してくれと。商品を送ることはすぐにはできない、今日は土日だからできないけれども、まずその情報をホームページに上げることで、それを見ることで助かるお母さ

んがいるかもしれない。あるいはその情報をプリントして避難所に貼ってくれる人がいるかもしれない。だからまずそれをやろうということで、水を汲みに来たスタッフをつかまえて、そういったこともやりました。

私たちは3つのことをやろうと考えたのですが、今お話したのは、まず、授乳服を送る活動、それから母乳の情報を、ホームページをはじめメルマガやいろんなもので流していく活動。そしてもう一つが、何といても活動を続けることです。私たちスタッフが、お母さんたちがやっている、そして青山の場合はそれこそ当日は都内ですから、帰宅が困難になって、夜中まで保育園に預けている子供を迎えに行けないというスタッフもいました。連れてくるスタッフはよかったですけれども、そうでないスタッフは迎えに行けなかったということがあって、私たちのような子供を連れてくる状態で活動を続けられるかということは非常に不安だったのですが、こんなときだからこそ、私たちは活動をしているよということを見せることが大切なんじゃないかということで、少ない人数でもやっていこうという、その3つをやってきた次第です。

いろいろお話したいことはあるのですが、まだ時間が、他の方も話がありますので、まずは当日の様子、そういったことをごさいますので、以上にしたいと思います。ありがとうございます。

【林】 どうもありがとうございました。

それでは、今日朝早くより仙台からお越しいただきました宗片恵美子さんです。現在、中央防災会議で「地方都市等における震災防災のあり方に関する専門調査会」の委員をなされ、特に女性の視点から今回の震災、女性のニーズを掘り起こし、さらにそれをいち早く政策提案につなげていこうということで、早くから活躍なされてきた方でございます。

【宗片】 皆さん、こんにちは。特定非営利活動法人イコールネット仙台の宗片です。よろしくお願いたします。

まずはこちらも大変な被災をされまして、本当に心よりお見舞を申し上げたいと思います。そして、私どもの被災地も全国から多くの方々から物資をいただき、またさまざまなお励ましをいただきました。これについても大変感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

私どもの団体は、男女共同参画について幅広く取り組む団体で、特に防災や災害復興に特化して活動をする団体ではありませんが、2008年に災害時における女性のニーズ調査という調査をいたしました。この調査をしました背景といいますが、宮城県沖地震が大変高い確率で発生するということが言われておりました。それから、阪神・淡路大震災の折に女性たちが抱えたさまざまな困難というものも明らかになっておりました、そういった背景もありまして、調査をしたわけです。これは仙台市内の女性たちを対象に、1,000人を超える女性たちを対象に調査をしたわけですが、お分かりのように、女性

というのは大変様々な暮らし方をしております。子育てをしていたり、介護をしていたり、妊娠中であつたり、お年寄りであり、障害を持っている、そういう方たちが災害を想定したときに抱える不安や心配というのは、こちらもまたさまざまにありました。

例えば、自宅で夫を介護しているけれども、避難をすることになったら、どうやって夫を連れて避難をしたらいいのだろうということにあられるように、様々な心配や不安が出されておりました、それらに対するきめ細かな防災対策が必要であるということで、私たちは提言をまとめました。

1つは、女性に対する支援が必要であるということと同時に、そうした女性たちの声を届ける、そういった女性たちが防災や災害復興に関する意思決定の場に入っていくと、なかなか女性の声が届かないということがあります。これまで防災や災害復興というと、どうしても男性に任せてきたところがありまして、なかなか女性たちが中核に入っていくことがありませんでしたので、そういう意味では女性たちが主体的に防災を考えることが必要であるということをもとめて提言をし、大変広域ではありますが、今回被災地となった場所、ほとんどの市町村に行つてこの調査結果をお伝えし、そしてお話をさせていただいたという経緯があります。

しかし、3月11日、震災が起きまして、本当に皮肉なもので、まさにタイムリーだったということがあるのかもしれませんが、私どもが一

番気がかりでしたのが、避難所で女性たちがどういう暮らし方をしているかということでした。提言の中でも女性の視点に立った避難所の運営というものに様々な希望が出ておりましたので、避難所に女性たちの状況を確認に行きましたら、トイレも男女別ではありませんし、更衣室ありませんし、もちろん授乳室ありません。直後の大変な状況を目の当たりにして、仕切りが欲しいとか、トイレを男女別にとはとても言える状況ではありませんでした、もう必死でしたので。

そういう中でだんだんに時間が過ぎていきまして、女性たちもストレスを抱えるようになりました。私どもはまずは女性たちがどんなことで困っているのか、私たちにできることはないだろうかということで、女性たちの声を集めましたところ、洗濯ができなくて困っているという声がありました。そこで、女性たちを対象にした洗濯代行ボランティアを始めました。女性たちから洗濯物をお預かりして、ボランティアが自宅で洗濯をしてお届けするというボランティアで、大変喜んでいただきました。

洗濯だけにはとどまらず、困っていることはないか。あるいは体調はどうなのか、必要なものはないのか、そういった女性たちのニーズを掘り起こしながら支援をするという活動を続けてきました。

女性たちは大変我慢をしております。自分は家を流されたけれども、隣の方はご家族まで亡くしたのだと、だから私は我慢をしなければい

けないということで、なかなか正直に本音を言うてくださらないので、私たちもせつせと足を運びまして、何とか皆さんのお気持ちを聞くことができるようになりました。

今、仙台市内は避難所が閉鎖されておりました、仮設住宅になっております。仮設住宅の中にある集会所に通いまして、サロン活動を行っています。女性たちが少しでもほっとできる時間を共有できたらいいかなということで、マッサージですとか手づくりのものをつくったりしながら、同じ時間を共有するというようなことで、女性たちの支援をしておりますが、これからは被災をした方たちの生活再建に向けた状況が大変深刻になっております。私たちがどのような支援をしていったらいいのか、これも一つ課題として私たちは考えていかなければいけないと思っているところです。

以上です。

【林】 どうもありがとうございます。ただいま自己紹介とみずからの震災当時の状況等々についてお話ししていただきました。

それでは、次にそうした体験、あるいは行っていることから何が見えてきたのか、何が問題なのか、女性の視点から見えてきた問題点は一体何なのか、課題は何なのかということについてお話をしていただきたいと思います。

それから、先ほどちょっと時間が短かったので、まだ1つ2つ付け加えてお話ししていただいても結構でございます。申しわけございませんけれども、1人8分ちょっとでお願いいたし



ます。

それでは、同じように石田さんからよろしく  
お願いします。

【石田】 今、課題はどうかというお話を  
いただいたのですが、私が、この震災の復興、あ  
るいは震災の対応に取り組んでいる中ですごく  
感じたのは、今回は男女共同参画というシンポ  
ジウムに出ささせていただきましたが、この震災  
復興の中ではごく普通に男女共同参画が実現さ  
れていたなというのを本当に実感しています。  
その事例を1つ2つお話しさせていただくと、  
あと今、復興から立ち上がるのは、ちょっとず  
れてしまうかもしれませんが、やっぱりどうし  
ても地域の力が必要なのだ、地域の力があつた  
から北茨城はここまで来られたのだ、というお  
話を少しさせていただければと思います。

震災当日の写真がありますが、震災当日、  
5,000人ぐらい避難されて、これは市役所の写真  
ですが、市役所にも本当に大勢の方がいらっし  
やいました。逃げてきた方も避難された方もい  
らっしゃったのですが、何かできることはあり  
ませんかということで市役所に手伝いに来てく  
れた方もいっぱいいらしたのです。それがまず  
本当に心強かったと思います。

初動体制としては、防災のマニュアルがある  
のですが、それによらずに、ちょっと想定以上  
のものが来たということで、男性は4人チーム  
で、とにかく消防の指揮下において救命に向か  
ってくれ、あるいは避難所がどこに、みんなど  
こに避難されている、とにかく市内の状況を集

めてくれ。女性も10人1組ぐらい、6チームぐ  
らい、全体の職員が250人で、女性職員は60人ぐ  
らいなのですが、そちらもリーダーをつかって  
チーム分けをしました。

それで、当日は5,000人避難しまして、避難所  
は20カ所ぐらいできました。5,000食ぐらいしか  
備蓄がなかったのです。その日の夜夕食を配つ  
たら、1回でなくなってしまったのです。どう  
しようかということになって、とにかく職員で  
おにぎりつくって、次の日の朝の分を届けよう  
ということになって、米も市民が持ってきてく  
れたり、職員が持ち寄ったりして入手しました。  
先ほど班分けしたというお話をしましたが、女  
性も全員で、徹夜でおにぎりを握りました。妊  
婦さんは2人いたのですが、帰しました。泣き  
ながら帰っていきましたね。こういうときに手  
伝えなくてごめんなさいなんて言って。残った  
人も、小さいお子さんを持った職員も今にして  
思えばいたので、酷なことをしたなと思ったの  
ですが、とにかくみんな5,000個握るんだとい  
うことで、手が真っ赤になりながら、ろうそくの  
火の下で握ったという状況です。

それを見かねた男性職員が、3時4時になり  
ましたら手伝い始めまして、これ泣かせる話な  
のですが、おじさんたち、何とか部長とか何と  
か道路建設課長とかが握っているのです。5,000  
個って一口に言いますけれども、どんなに頑張  
って、やっても1時間に700個ぐらいが限度なの  
ですね。朝を迎えて何とか5,000個できたので  
すが、先ほど鹿嶋先生のお話で、男性上司が女性

をどう見るかとありましたけれども、この後しばらくたって総務部長が、あの日女性職員が全員徹夜したよねって。ここまで女性が頑張っておれ思わなかった。女性も見直したし、やっぱり何ていうのかな、頑張る姿に胸打たれたということで、その後の男女の職員の結束が少し深まったのかなというふうにも思います。

それと、特徴的なこととしては、これはちょっとわかりづらいと思うのですが、スライドの上のほうに白いところが見えていると思うのですが、あれは授乳室です。これは市役所内で、こちらが市民課の窓口とかなんですが、こういう状況で、これは当日ですね。だれに言われるでもなく、職員みずから考えたのだと思うのですね。授乳室とおむつがえをする部屋をつくって、そちらで対応してもらったということです。

それと、今回の震災で一番恐怖だったのは、職員が私のところに来まして、ミルクの備蓄がありませんと言ったのです。北茨城市はゼロ歳から1歳半ぐらいまでの子が600人ぐらいいるのですが、あの当時の北茨城って、もしかしたら陸の孤島になってしまうのではないかという恐怖があったのです。JRも常磐道も止まってしまふ。みんなガソリンもない。このまま兵糧攻めみたいになったときにどうするのだと。大人はとにかく米があれば生きていけますが、赤ちゃんってミルクがなかったら餓死してしまうのではないですか。あのとき、私は本当に一番怖かったです。

とにかくお金はいくらかかってもいいから、

すぐ業者に電話をしてミルクを押さえてくれ、何缶でもいいからあるだけ手に入れてくれという話をしたんですが、その後すぐ来まして、もう業者もないと言っていますと。本社に電話したのですが、そっちまで持っていけないと言っていますと言われて、あのときが一番怖かったです。すぐ茨城県に電話をして、何とかミルクを手配してくださいという懇願をしまして、3日4日後にやっと来たのですが、あのときがミルクの缶が来るまでが本当に私は怖かったです。ここで餓死者を出して、赤ちゃんどうしようというのは本当に怖かったですね。今後備蓄を考える上で、ミルクって1年ぐらいしか賞味期限がないのですが、業者と提携するなりして、すぐ入手できるような体制をとっていかなきゃならないなというふうに思います。

3つ目ですけれども、先ほど地域の力を感じたというふうに申し上げましたが、市のほうでは3日間おにぎりを何とか、1日に2食しか、結局3万個ぐらい握ったのですが、2回しか届けられなかったのですが、市民の方、自分も被災されているのに、それぞれ20カ所の避難所に近所の方が集まってくださって、炊き出しをしてくださいました。これは多分、それぞれの地域でそういう活動をなさった方々が今日お集まりなんじゃないかなというふうに思うのですが、本当にありがたいと思います。

次のスライドを見ますと、これは高校生がボランティアをしてくれたのですが、高齢世帯はごみを道路に出しておけば全部市で何とかしま

すよと言っても、道路にさえ出せない、家の中が片づけられない高齢世帯もあるのですね。そういったところにボランティアさんに行っていて、手伝いをしてもらいました。女子高校生も支援物資を配布したりと、自分ができる範囲のことを皆さん黙々とやってくださいました。

避難所にいる方はまだよかったです、避難所に行かれない方々についてもボランティアが、ご近所声かけ隊という方々が、うちの市は1,000人ぐらいいらっしゃるのですが、それぞれいつも回っている方々、いつもの活動の延長線上で気になるお宅に声をかけていただいたり、支援物資を配っていただいたり、あるいは女性消防団がひとり暮らしの家に行ってくださいたりと、とにかく普段の活動の延長線上でみんな頑張ってくれた。それも行政の依頼とかなくてもやってくださった。本当に地域の力だったというふうに思います。

先ほども出ましたが、今、復興に向けてやっていますが、900軒ぐらいい壊してくれということで、600軒もう取り壊しています。今コミュニティがずたずたになってきているのですね。そうするともう一度、先ほど地域の力と申しましたが、強い地域の力をどう結びつけて今後の地域づくりをしていくかが、今、私たちが問われていることなのだなというふうに思っています。

市民の方々5,000人にアンケートをとりましたら、7割ぐらいの方はもう、ちょっと海の近くに戻りたくないなという方もいらっしゃるんで

すね。そういう方々にどこに住んでいただくのか。でも、家が残っている人はそこで、今まで10軒の常会だったのが3軒でやれるのかどうか、その辺もよく考えていかなければならないと思います。

行政だけでは限りもありますので、市民、あるいは企業、皆さん手をとりながら頑張りたいなというふうに思っています。

【林】 どうもありがとうございます。びっくりしました。さすがですね。

今、地域の力と言ってくれましたが、やはり今回地域の力ということで、あれだけの災害がありながら、一人も死者も出さなかったという大洗の取組というの、皆さん方そこにはどんな地域の力があつたのだろうと思われる方もいると思います。私は高橋さんというと、やっぱりこういう人がいるからだなというように、こういう人がきっとたくさんいるのだろうというふうに思います。

じゃ、高橋さん、お願いします。

【高橋】 震災から復旧、そして復興までの話をちょっとさせていただきます。

復旧を目指す段階で、初めに私たちができることを考えた結果、起こした行動は炊き出しでした。崩れた、壊れた船や漁業の道具、瓦れきの回収などの作業を行う皆さんたちのスタミナを温かい食事で支えました。また、男性たちが力仕事を中心とした作業を行っていたのに対し、私たち女性部はヘドロなどで汚れてしまったと

ころを何とか元通りにきれいにしようと、清掃を中心とした活動を行いました。おおむね後片づけのめどがついたころ、「かあちゃんの店」の復旧に取り組んだ際には、組合の企画販売部の男性役員が協力してくれ、建設会社や厨房機器の業者と積極的に交渉や打ち合わせを行ってくれました。そのおかげで、震災から81日後の6月1日という早い時期に「かあちゃんの店」を再開することができました。

漁業というものは、男性が海で魚をとり、女性が市場で魚を売るというぐあいに、既に男女が共同で作業を行っています。「かあちゃんの店」でも父ちゃんたちがとってきた魚を母ちゃんたちが料理して提供しています。しかし、漁業協同組合の役員は男性だけで占められています。今回の震災ではかあちゃんの店を担当する男性役員たちが頑張ってくれたおかげで、早期の復旧にこぎ着けましたが、女性の役員がいればよりスムーズに、よりきめ細かに、現場で困っていることや私たち女性の意見を組合へ訴えることができたかと思います。

以上です。

【林】 どうもありがとうございました。後から足りないところ、こちらのほうでお聞きするかもしれませんので、またよろしく願いいたします。

それでは、先ほど授乳服のことを聞いてお分かりになられたと思うのですが、被災地は当然避難場所とか、集団で老若男女全部一緒になっているわけですから、子供に乳を与えるという

ことはいろいろ思うところたくさんあると思います。恥ずかしいと思う人もいるかもしれませんが、多いと思います。

日本の和服の伝統をうまく利用して開発した授乳服というのは非常に被災地で役に立ったということも聞いております。では、この辺も含めてよろしく願います。

【光畑】 服のことまでありがとうございます。

そうですね、主に2つのこと。私たちの支援は非常にピンポイントの支援だと思うのですが、これの意味ということと、それから先が見えないあの時期、子供が小さいスタッフが多いので、その不安の中、支援することで私たち自身が支えられていたということがあったと思います。その2つをお話したいと思います。

まず、支援の状況を本当はパネルにして持ってくればよかったのですが、外のロビーにも展示があります。このくらいのチラシで置いていただけなのですが、よろしければ後でごらんいただきたいと思います。

先ほどちょっとお話をしましたように、新潟の経験があり、被災地で授乳服があるということでお母さん方のプライバシーが保たれ、子育てに関してメリットがあるということで、授乳服を送る活動を始めました。最初は社内にあるもの、倉庫に行ってすぐ送れるものを何とかかき集めてお送りする状態でした。実は新潟では、お客様、あるいはユーザーさんから、今まで使い終わった品をきれいにラッピングしてメッセ

ージをつけて送るという活動をしていたのですね。それをまたやらないのですかという問い合わせが、震災から間もなくいっぱい入ってきました。

やりたいと思いましたが、今回は私たち自身それだけの余裕がありませんでした。それで、ではどうでしょうか。でも多分それを言うてくださるお母さんたちも、自分たちが何かをやりたい。同じような立場の人たちが今被災地にいるのだから、何かをやりたいと思ってらっしゃるわけです。その気持ちに何かこたえることができるのは、今までやっていた私たちしかないのではないかということで、ではどうすればいいだろうと考えたのが手ぬぐいなのです。

ちょうどチャリティーに使おうと思っていた手ぬぐいがありまして、そこに展示してあるのですけれども、これが1,200円。もともと、そのうち200円をいろんなところでお母さんたちがやっているイベントに寄附しようということをつくった手ぬぐいだったのですけれども、これをそのまま使って、倉庫の出入庫などで200円かかるので、残りの1,000円を全部授乳服にして被災地に送ろう。それであれば、それを買うことでお母さんたちが被災地につながるし、支援することができるからということでスタートしました。3月18日という比較的早い時期に、授乳服を早々に送ることができたのも、それまで新潟での活動があったからだ、それが大きかったかなというふうに思います。常磐道が通れなかったのです、新潟経由で物資を送るのです。そ

う新潟のルートを使うことができました。

私たちスタッフも、もうガソリンもない状態、どうやってこの後やっていくのだろう。原発のこともあって、非常に不安な状態だったのですけれども、何かやりたいという気持ちはずっとありました。そして、実際にこの商品を送った途端に、本当にスタッフ自身が楽になったという実感がありました。多分、ここにいる皆さんもそうした活動をしていらした方が非常にたくさんいらっしゃると思うのですけれども、その気持ちを分かっていただけではないかと思っています。

これが私たちだけではないということも体験しました。その後、被災地、仙台をはじめあちこちにこの商品をお持ちしたのです。その市民団体の方や行政の方にお目にかかって、「こういうふうな支援ができます、授乳服が必要な方があればこれをお送りすることができますよ」と申しあげたら、「それはいただきたいところはあるけれども、それ以外にこのチラシ自体を置かせてもらえないか」というふうなことを言われたのです。

これは非常に驚きまして、本当に被害が甚大だった地域で、そこから私たちはお金をもらおうなんて思わないですし、そこから支援してもらおうとは思わないわけです。けれども、それを置かれないというのは、恐らく先ほど宗片さんとお話しされた洗濯代行もそうだと思うのですけれども、被災地の方自身が非常に不安定な状況で、何かをやりたい、何かで役に立ちた



いと思っていられる。その気持ちはとてもありがたいことで、被害を受けた方のために確かになるのだけれども、その一方で、支援をすることで自分自身も支えられているという状況があったのだらうなということは思います。支援をすることで支えられるということです。

今だんだんと地震に対するニュースというのが、避難所が閉鎖されて減ってきています。今、被災地の方々とお話すると、やはりニュースが減ってきている、報道が減ってきているということをお心配されています。忘れられてしまうのではないかと。まだまだ復興に時間がかかるという状況の中で、そこを思い続けていくことが必要だと思うのです。でも、それを漠然と思い続けることはなかなか難しく、ですから、私たちの活動というのは授乳中のお母さん、非常にピンポイント、全体の中のごく少数の人なのですけれども、でもだからこそちゃんと「思う」ことができるのです。

「授乳服をお送りしますよ」と、ある自治体、ある避難所を取りまとめているところにご連絡しましたら、「授乳服は間に合っています、足りています」と言われたことがあるのです。間に合っているわけではないのです。多分この中の大勢の方も授乳服なんて初めて聞いたよという方が多いでしょうし、そんなものが避難所にあるわけではないのです。でも間に合っている、と言われる。この活動が継続していくと、今度は乳がんの患者の方で私たちのところのブラを乳がんブラとして使ってくださいという方から連絡

をいただいて、被災地でブラが不足している。乳がんで手術をした後の方々とか病気の方とか高齢者の方、そうした方にこのブラをくれないかということもいただいて、そうした活動も始めました。

つまり、同じ立場の方が被災地にいたらどうだろうということをおもうのは比較的やりやすいことだと思います。そして、それを思い続けることもできると思います。それを積み重ねることで、お母さん、それから病気の方、あるいは障害がある方、あとは本当に元気で頑張り過ぎている方というのものもあるかもしれないですね。それぞれの自分と同じような状況の方が被災地ではどうなのだろうと考えることでしたらできると思います。その積み重ねがいろんな穴を埋めていくことになるのではないかなと思います。

以上です。

【林】 どうもありがとうございました。現地に入りますと、本当のニーズ、本当に求めているものが声になって出てこないということがよくあります。例えば、医者で精神科医の人が入っていこうとすると、入る前に拒絶される。あるいはいるということはもうデータで分かっているけれども、うちにはそういう人はおりませんか、いろんなケースがあります。そののだけれどリーダーで、どうやってコミュニティが構成されているのかということ、そこにおける女性の視点というのがまだまだいろいろ足りないかなというのは、私も現場に入って痛感しているところでもございます。

そういうところも含めて、宗片さん、そういうことをよくご存じでしょうから、よろしくお願ひいたします。

【宗片】 多分、光畑さんの授乳服があちこちで大活躍してくれたのだと思います。

私たちも避難所を回っていますと、本当に間仕切りでもあればいいんですが、ないところが結構多いのです。ですから、プライベートな空間というのがなかなか保証されないと。そういう中で、着がえは布団の中でする、授乳はもう恥ずかしくて胸を出せないの、母乳はやめてミルクに切りかえました。ところが、ミルクはたくさん来ているのですが、哺乳瓶がないのです。それから、ミルクを溶かすにはお湯がなければいけません。ライフラインは全部止まっているのです。ですから、お母さんたちは赤ちゃんをどう育てていいのかということでは、大変に混乱をし、避難所から逃げてきましたという方もたくさんいらっしゃいました。もう2階部分しか残ってないのです。1階部分はほとんど水が入ってしまって使えないのだけれども、何とか自宅の2階部分で暮らしていますとか。

また、子供たちが不安定で、避難所の中で走り回ったりしてみんなに迷惑をかけるので、車の中に避難をしていますというような。ですから、子育て中のお母さんたちの困難というのは数多くあったと思います。

また、今回の震災では性別役割分業意識（固定的性別役割分担）が顕著に表れました。これは、私たちは男女共同参画を何とか実現したい

とこれまで努力したにもかかわらず、なぜここでこんなにも性別役割がはっきり出てしまったのだらうと、大変残念に思いました。といいますのも、避難所はほとんど男性がリーダーです。そして女性がリーダーというのはほんの一握りです。ですから、男性のところに女性たちの声が届かないのです。更衣室が欲しいというのをなかなか分かりませんね。それから、授乳室はもちろんのことです。

それから、間仕切りが欲しいという女性の声も仕切りを置くことによって不審者が入ってきたらどうするのだ、病人が出たらどうするのだ、全体の避難所の中の一体感が損なわれるというようなことで、仕切りもなかなか使ってもらえない。体育館の避難所の入り口に段ボールが山積みになっているのです。それは仕切り用に支給されたものなのですが、それも使えない。そういう状況がありました。

ですから、そういう中で私たちが女性の支援ということで入ったわけなのですが、女性たちならではの物資というのがあるのです。生理用品やそういったものだけではなく、化粧品が欲しいとか、自分のサイズに合った下着が欲しいとか、それから裁縫箱が欲しいとか、鏡が欲しい。それは、男性から見るとぜいたく品なのです。行政に持っていかうとすると、ここに200人いるから200人分用意してくれというのです。それが公平なのだ。そうしますと、とてもそんなものは私たち一介のNPOでは用意できません。ですから、知り合いを通して20個、30個と

持って行って、そして欲しい人たちに、必要な人に渡してほしいというような活動をずっと続けてきました。ですから、後半のほうになると仕切りが出てきたりしてございましたけれども、やはりなかなかプライベートな空間が保証されずに、何か月だと思えます、半年近くなのです。そこでの避難所生活です。どんなにストレスが大きかったかということをご想像いただけるのではないかと思います。そういう意味では、女性たちがもっと声を出しましょうと。私たちは声がけをしました。更衣室が欲しいなら欲しいと言いましょと。

それから、被災をした女性たちが避難所の中で避難をしている方たち、200人、300人の食事をつくるのです。調理室で。朝の6時ぐらいから夜の9時ぐらいまで缶詰です。朝食をつくればすぐに昼食です。昼食が終われば夕食の準備です。後片づけまで済ませると本当に9時10時まで。それは例えばローテーションで週に2回回ってくるにしても、これは大きな負担です。自分も被災をして大変痛みを抱えているわけですので、そういう中で、缶詰状態で調理室の中で被災者の方たちの食事をつくるというのは大変きついことですね。ですから、そういったことも負担だということは言っていましょとということですね。

女性たちはなかなかそういった発言ができませんでした。そういう意味で、やはり性別役割分業意識というのが大きな壁になったというふうに思います。これは考えていかなければいけ

ないと思いますし、避難所の運営、そして今も仮設住宅のリーダーというのは全部男性です。そして、その男性たちが仕事に行った間の昼間は、その男性のリーダーの妻が男性の名前で窓口になっているのです。これは大変ですね。いわゆる男女共同参画がずっと逆行してしまったような気がしています。そこを何とか変えていかなければいけないと思います。ですから、防災、災害復興というのは男性の領域と考えられがちですけれども、そこに女性たちが女性の言葉を届けるという立場で参加していくことが大変大事だと思いますね。

今、仮設住宅で何とか自立に向けた支援ができないかと思っております、仮設の中の集会所で女性たちがようやくですが、手づくりのものをつくり始めています。編み物をしたり、レース編みをしたり。それをラッピングして、そこに自分たちで金額をつけて、それを私たちに売ってほしいというふうに私たちに託してくれています。それをいろいろなイベントに私たちが持って行って、販売をして、利益をお返しすると、それでまた次の毛糸を買いますというふうに、だんだんと前に一歩ずつ歩き出しております、そこを何とか自立に向けた形で支援していきたいというふうに思っています。

仙台市の場合は復興検討会議が立ち上がりまして、そこに私も入ったのですが、16人中女性は3人です。これはゼロのところもあります。3人というのは大変に多いのです。みんな笑いますけれども、本当なのですよ。1人とか2人

の世界でして、3人は多いですねと言われるのですね。仙台市の場合は市長が女性なものですから、女性の市長の意向もあったのかもしれませんが、それでも検討会議で私たちが男女共同参画の視点をといても、なかなか難しいです。それよりもどこに集団移転のラインを引いたらいいのか。生活再建をどうしたらいいのか。それが優先です。確かに分かります。けれども、女性たちの声を届けるという仕組みをその中でつくっていきませんか、また女性たちは同じ困難を抱えることになるんです。行政の限界も見ました。そういう意味では地域の防災力を高めていかなければなりません。そのときに地域の防災力にも中核として女性たちが入っていかなければならない。これは今とても痛感しております。

以上です。

【林】 どうもありがとうございました。

高橋さんにちょっとお聞きしたいのですが、震災復旧を目指すときに、炊き出しをやられたと思うのですが、その辺の話を少ししていただけますか。

【高橋】 炊き出しの件なのですけれども、本当に地震があつて津波の警報が出たときには船は沖へ出したのですね。男の人は2日もご飯を全然食べないのです。2日目にやっとおにぎりが1個配布になっただけなのです。

そういう中で、沖に出た船が戻ったときには岸壁はすごかったです。瓦れきの山なのです。船も転覆していました。そういう中で片づけを

やるのに、皆さん疲れていますから、何とか炊き出しをとということで、ご飯と温かい豚汁をつくって提供いたしました。そういうことでございます。

【林】 どうもありがとうございました。温かくて、喜んだ様子が目に浮かびます。

それでは、次に1人大体3分から4分ぐらいでまとめていただければ幸いなのですが、こうした皆様方、震災の体験、それから震災に対する対応、そういうものを通してこれから地域社会、地域コミュニティ、自分たちの身の回りの社会、こんなふうになってくれたらいいとか、何が例えば防災、あるいは減災という点で女性の視点から必要なのかというようなことについて、それぞれお話ししていただければと思います。

では、また順番どおりですけれども、石田さんからお願いします。

【石田】 今、宗片さんのほうから仙台市で復興委員のうち3人だというお話でしたが、うちのほうは19人のうち5人入っていただいているという状況です。今、お三方のパネリストの方のお話を聞きながら私もいろいろ反省しているところがあつて、私も女性ですが、やはり個人の力量に不足があつて、なかなか思い至らなかったところがあつたなというふうに思っています。被災者をお風呂に入れることは思いついても、洗濯まで思いつかなかったな、と思いつながら。ですから、いろんな方の意見を聞いて、ソフトもハードも両輪で地域をつくっていかな

きゃならないのだろうと思います。

先ほどもお話ししましたが、NPOの活動をされている方もいらっしゃいますし、北茨城だと漁協もいろんな活動をしていただいています。地域もありますし、企業もありますし、そういった方々の力を結集してやっていかなきゃならないなど、そのようなことを今反省するとともに今後につなげていきたいなというふうに思っています。

【林】 どうもありがとうございました。それでは、高橋さん、お願いします。

【高橋】 女性の視点から見えてきたことなのですけれども、私たちは魚を通して地域の活性化を図っています。港町である大洗の特徴を活かして、新鮮な魚介類を提供することで、県内の皆さんをはじめ、東京・栃木・群馬など他県の方たちも大洗を訪れてくれるようになりました。漁業というものは、海の仕事は男性、陸の仕事は女性というふうに言いましたが、家庭の財布のひもを握っているのは女性です。つまり漁業の経営の仕事をしているのは主に女性なのです。この経験と知恵が組合の経営に生かされれば、漁業はもっとよくなり、漁業の町である大洗はもっとよくなると思います。将来、女性の役員が誕生すれば、男性と女性が同じ土俵で意見を出し合って、よりよい社会づくりを進めていけるようになるのではないかと思います。

以上です。

【林】 どうもありがとうございます。漁業の中というのは、我々一般的に中がよく分から

ないのですが、今日のお話を聞くと、女性の意見をどこまで反映しているのかというところが、あるいは女性のリーダーがどの程度つくられているのかとか、その辺がよく見えないので、恐らく課題なのかなという感想を持っております。やはり女性の意見がどれぐらい反映され、余り反映されないところがあります。どうもありがとうございます。

それでは光畑さん、お願いします。

【光畑】 ちょっとまた違う視点からのお話をしたいと思います。

震災後、ガソリンが不足しましたよね。つくばは比較的北のほうよりは早かったのですけれども、やはりガソリンが2時間待ち、3時間待ちというふうな状況が続きました。スタッフも小さい子供がいますし、子連れで来るのも大変だろうと。一応ネットで仕事はできるようになっていますし、遠隔でパソコンを使って会議もできますから、会社は出てこなくてもいいよという指示を出しました。何があるか分かりませんし。

ところがびっくりしたのですが、全員会社に出てくるのです。聞いてみると、子連れで会社へ行けるので安心して行ける。子供を置いて離れるのだったら行けなかったけれども、と。小学生、中学生はいつもは来ないのですけれども、別に連れてきても良いのです。だから大きい子も来ていました。だから仕事を楽に続けることができたし、会社で職場のみんなと会えることで安心もできたし、情報共有もできた。デマに



惑わされずに済んだということを書いていました。

私たちは子供が小さい、いつ病気をするか分からない、長い時間働けない、そういう状態をどうにかするというので、連れてきてもいい、あるいは短時間で帰ってもいい、在宅でやっていい、いろんな施策をとっているわけですよね。それが、震災後のこういったリスクがある状況では非常に有効に働いて、業務を継続することができたということです。

今までワーク・ライフ・バランスというのは進めなければいけないよねというふうに言っていたけれども、これを見ても分かるように、本当に企業のリスクを回避する意味でやっていかなければいけないことなんだと、がみんな分かってきたのではないかなと思います。

ワーク・ライフ・バランスってみんなが無理しないで楽に生きられることじゃないかって私は思っているのですけれども、働くことに関しては、何か事情がある人を全く排除しない働き方しかできなかったのが、子育てだったり介護だったり、いろんな事情がある人がどんどんこれから増えていく。それに対する働き方ができるとかなというふうに思っています。

これから日本は少子高齢化が進んで、社会全体に事情がある状態になっていくのですよね。であれば、やはりこうした多様な働き方、人に優しい働き方というのがこれからもっと求められるし、働き方だけではなくて、生き方についても求められていく。それがはっきり出てきた、

そのきっかけになったのがこの震災ではないかなと思います。

以上です。

【林】 震災を通して、経験は男も女も同じだと。そこからやっぱり新たに見えてきたものとしてワーク・ライフ・バランス。これは確かに男と女の関係は、ちょっと文学的にラビリンズだといって、迷宮だといって、永遠に分らないものと言っていたのが、実はお互いの役割をやってみるとよく分かって、そこに一つの理解と信頼が生まれるということ。そういう何かきっかけを与えてくれたかなと思います。

それでは宗片さん。

【宗片】 女性の声を反映するのはなぜ必要なのかというお話になるのですが、これ自体は問題かもしれませんが、女性たちというのはやっぱり子供のそばにいたり、お年寄りのそばにいたり、障害を持っている方のそばにいたり、病気を抱えている人たちのそばにいるのが圧倒的に女性なのです。本来はこれも問題ですよね。ここに男性もいてほしいのですけれども、ただ現実問題として女性たちがいて、その人たちが抱える、特に災害が起きたときに抱える困難を女性たちは代弁できるのです。そういう意味では、女性たちの声を反映させていかなければ、より多くの人たちが災害の中で困難を抱えてしまうことになってしまうのだと思うのです。

ですから、そういう意味では女性がやはり主体的にさまざまな意思決定の場に、防災や災害復興に関してはまずはかかわっていかなければ

いけないということをご理解いただきたいと思  
いますし、高橋さんはこれからますます活躍し  
てくださることを仙台から大いに期待をしてい  
きたいと思っております。

それから、地域防災についてですけれども、  
仙台もそうですが、沿岸部があり、内陸部があ  
り、その他の地域でありということで、沿岸部  
は沿岸部の防災訓練が必要なのですよね。今回  
津波がこんなに大規模で襲ってきたことを考え  
れば、やっぱり沿岸部が考えなければいけない  
地域防災ってあるはずなのです。それから内  
陸部で地割れが起きたり、家が倒壊することを  
考えると、そういう場合に必要な訓練だったり、  
計画だったり。つまり地域によって違うはずな  
のです。ところが、仙台の場合も地震が来る  
ことがと言われてさまざまに防災訓練などをや  
っていたのですが、大体みんな火災訓練をして  
炊き出しをしていた。これはどの程度役に立  
ったのかということがあるわけなのです。

ですから、やっぱり地域の中で、自分の地域  
はどういう地域なのか、それを確認することが  
必要だと思います。住んでいる人たちが、若い  
人が多いのか、3世代が多いのか、あるいは  
お年寄りが多いのか、核家族が多いのかとい  
うような、その地域性というのを十分に確認し  
た上で、ここに必要な訓練はどういうものな  
だろう。お年寄りが多いのであれば、お年寄り  
たちがどう避難したらいいのかとか、地域の中  
で具体的に考えていく必要があると思います。  
今回それを私たちは学習してしまったというと

ころがありますけれども、女性は特に地域をよ  
く知っていますから、女性の声もしっかり入っ  
た形での地域防災というのを考えていただきた  
い。

2時46分という時間は、男性は地域にはいな  
いのですよ。女性たちが圧倒的にそこで暮らし  
ていた時間です。そのときに女性たちも主体的  
に防災にかかわっていきませんと、やっぱり犠  
牲者は増えるのです。そういう意味では、ぜひ  
地域防災力を高めるという意味では、防災リー  
ダーに女性たちもなってください。仙台では今  
回、地域防災リーダーを養成します。その中に  
女性たちも一定割合を入れようということを私  
たちが提案していきたいと思っています。

今回、避難所も仙台の場合にはたくさんの課  
題が出ました。反省点もたくさん出ました。運  
営もばらばらで、その中でさまざまな困難を抱  
える人が出てしまったということでは、仙台モ  
デルを発信していこうということになっていま  
す。これは反省点も含め、いいことも悪いこと  
も全部総括して仙台モデルとして、今後のため  
に全国発信していこうということで、これから  
その整理を始めるところです。

そういう意味では、ぜひ皆さんが防災も含め  
て地域に目を向ける。女性たちがたくさん地域  
で暮らしているわけですから、そしてリーダー  
のような形で活動しているわけですから、ぜひ  
力を発揮していただきたいということを期待し  
て終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

【 林 】 どうもありがとうございました。時間がたつのは随分早いものでございまして、あと10分ぐらいしかございません。今日のお話を聞いて、私、今、最後に宗片さんのほうから、ぜひ地域に向けていただきたいということを、これまでことにそのとおりでございまして、茨城県も第2次男女共同参画基本計画というものを最近つくりましたが、私も副委員長という立場で参画させていただきましたが、そこでも大きな問題として2点指摘していたことがございます。一つは、地域に向けていこう、それからただ啓蒙だけではなくアクションを考えていこう。それから、男性にも積極的に参画してもらおう。そういう視点を出しました。

ただ、一つ残念、今考えればもう一つ踏み込めばよかったかなという一つの反省点としては、国のほうは指摘しておりましたが、防災です。これについては章立てで設けることになっている、内容的には取り入れていたのですけれども、1章設けてやるべきだったなということを、今日特に4人のパネラーの話聞いて、そのことを強く思いました。地域に目を向ける。それから、この4人の話から共通している点は、やはりこの危機の中から女性のリーダーというものを発掘し、また女性のリーダーというものをつくっていかなければならない。

危機のときは、確かに最初は、例えば自衛隊とか消防団とか、男性系が目立っておりますが、これは多分一過性的なことだと思います。その後ずっと続く日常の改革というところになると、

これも女性、地域の中で女性のほうがもっとかかわっている場合が多いわけですから、学ばなければならないこと。むしろ危機こそ女性というものを、危機しか見えないかもしれないんですが、日常の中で確実なものとして、生きていく一人ひとりの生活の視点に立ったときに、女性から学ぶこと、非常に大きいなと強く感じました。また同時に、地域におけるリーダーとして女性が積極的に参画していかなければならないということを強く感じました。

若干時間もございます。あと5分ぐらいありますよね。では、せっかくの機会ですから、会場の中から4人に何かこんなことを聞いてみたいということがございましたら、どうぞ。どうぞといってもたくさん聞くことはできないと思いますが、1人2人は大丈夫だと思います。どなたでも。

【 廣松（質問者） 】 お話ありがとうございました。すごくいろいろなご視点でお話をいただけて、大変参考になりました。神奈川県から参りました廣松と申します。

2つちょっと気になったのでお聞きしたいのですが、1つは石田さんがおっしゃっていた新たな地域のネットワークづくりの必要性というのがキーワードで気になりました。もともと結構地域にもつながりが強い場所であったということなのですが、なぜ強いつながりがもともとあったかというのをどう考えていらっしゃるかということと、新しくつくるに向けてどのように取り組んでいこうと思っていच्छや

るか、もし何かお考えがあったらお伺いできたらなと思います。

あともう一つお伺いしたいのが、メディアの役割というのが今回お話の中で出てこなかったのですけれども、とても大きい役割があるのではないかなと思っておりまして、例えば化粧品が届いたというのが結構メディアで大きく報道されて、好意的に受け入れられていたのですごくいいなと思ったのですが、考えてみたらたばことかアルコール、男性の嗜好品というイメージが結構強く思われているものについては、特別新しく届いたとかいう話もなかったというのを考えると、男女共同参画で被災地という立場からメディアを見たときに何か感じられたこととか、そういったことがあればお聞かせいただきたいなと思います。よろしくをお願いします。

【石田】 まず地域のネットワークなのですが、北茨城市は昭和30年の最初のころ、7カ町村が合併してできました。先ほど平潟港、大津港、あと磯原というふうに申し上げたのですが、それぞれの地域に住んでいる方は、それぞれの地域がこの世で一番好きという方々です。やっぱり地域への愛着がまずあったのではないかなというふうに思います。それをどういう、先ほど申し上げたように、今回行政だけで足りないのでは何かお願いしますといっても、やはり普段から動いていないと動けないのではないかと思うのです。

ご近所見守り隊というのが1,000人いると申し上げましたが、大体学校区、小学校単位でそれ

ぞれリーダーがいて、ネットワーク化されているのですが、その人たちが普段見守りとか子供たちの登下校とか見ている方々なのですけれども、地域のいろんな細かなところまで、これは男性も女性も関係なく目が行き届いているので、その方々が本当に活躍してくださったというのが大きいと思います。

これに私たちがあぐらをかいてはいけませんので、そこをしっかりと評価して、どういう方々がどういう動きをしてくださったのかというのをもう一度きっちり検証して、それをさらに強固なものにするようにしていきたいというのが、これからもうちょっとネットワークを強くしたいということです。

先ほど申し上げたように、今あるところが10軒のうち5軒が壊れちゃった、5軒が残っている。そうすると、この5軒をどうするか、残った5軒をどうするか、どうコミュニティを再生するか、そこのところが知恵の出し合いだし、みんなで集団移転してもらうのか、それとも戻ってもらうのか。そこは一人ひとりきっちりお話をさせていただきながら、みんなが納得できる方向でまちを持っていきたいというふうに思っています。

あと、メディアのお話は私ですか。

【廣松】 できればいろいろな視点で聞かせていただきたいと思うのですけれども。

【石田】 もしご意見がございましたら。

【宗片】 メディアについては、今回これまで阪神・淡路もそうでしたけれども、やはり女

性の視点で災害を考えるということは、幾らかあったでしょうけれども、余りそれは広がっていなかったと思うのですね。ところが今回は女性の視点で、避難所も含めて考えなければいけないという、女性の記者が増えてきたということがとても顕著に見えました。

記事を書くにあたって女性の記者が避難所に入ってきて、私ども仙台市もそうでしたけれども、全国紙の女性の記者がリュックをしょって取材に来て、そしてきめ細かく私たちにも取材をし、そしてそれを取り上げていった。ですから、女性の立場から避難所、災害を考えようというのが、メディアのあちこちで取り上げられたというのは、これは一つの大きな前進だったというふうに思います。

【 廣松 】 ありがとうございます。

【 林 】 あと1分ちょっとありますので、あと1人ぐらいは可能かと思えます。どんなことでもいいと思えます。

【 佐々木（質問者） 】 石岡市から来ました佐々木と申します。

最初の質問の方がおっしゃった地域のことと、今それを私も聞きたかったので、今それがよく分かりました。

それから、これはちょっと感想なのですが、皆さんここで聞いていてやっぱり女性の副市長がいるところとか、それからNPOの中でとにかく中心的な役割を担っている女性がいるということだけで、これだけで何か、自分たちのこういうことを気づいてくれる人たちがい

るのだということが分かったと思うのです。結局これが男女共同参画を進めていこうとって、もう何年も前から行政や市民団体が続けてきたことだと思えます。前千葉県知事の堂本さんが茨城県にいらっしゃったときに、日常の生活が災害のときに顕在化するということをおっしゃっていたのが、私、ものすごく印象に残っていて、やはり石田さんもおっしゃっていましたけれども、副市長さんになられて2年間あった。その中で新聞なんかを見ていると、北茨城市の女性の消防団員ができたということで活躍しているということ、私も新聞で見っていました。

石田さんのお話を聞くのは今回2回目なのですけれども、これだけ女の人为中心的な、そういうリーダー的なところに行くと、さっとそこがくみ上げられて、なおかつさっと県のほうに行って、そこでさっと来る。やっぱり私たち市民としては、そういう人を選んでいかなきゃいけない。それは、結局は私たちにとって得なことなのだということを、今日4人の方のお話を聞いてものすごく感じました。

やはり行政がやってくれるから、民生委員さん等いろいろいらっしゃいますけれども、じいちゃんたちにばかりやらせてないで、そういう行政懇談会があるとか、何々の公民館の単位でこういう会議がありますよといったときには、行って、聞いて、そして自分たちの町や村や市がどういうふうな状態なのかということを常に感じてないといけないのだなということを思いました。できれば茨城県の中の市町村で、副市



長さんにはぜひ女性を推薦していただいたりとか、それから普段からいろいろと研さんをして、何かあったときにそういった地位に女性の方がいられるようなことを自分たちも常に提言をしていったりしていかなければいけないのではないかなと思いました。ありがとうございました。

【林】 時間になりましたので、これで終わります。

それでは、この4人のパネラーにもう一度盛大な拍手をお願いいたします。

